

御所市文化財調査報告書 第4集

奈良県御所市室
巨勢山境谷10号墳発掘調査報告

昭和60年3月

御所市教育委員会

奈良県御所市室

巨勢山境谷10号墳発掘調査報告

序 文

御所市教育委員会は、大和王権の統一がすすめられる4世紀から6・7世紀にかけての古墳時代に最大の注目を払っているものであります。

それは、奈良県下でも、この時代の古墳遺跡が集中的に本市に存在しており、とくに巨勢山古墳群がその典型的なものと見えるからです。

巨勢山境谷10号墳の発掘調査は第1年次調査（条池南古墳、同北古墳）につづく、第2年次調査にあたるもので、昭和59年8月7日から10月16日までの間、慎重にすすめられました。

本墳の築造期は6世紀初頭以降とみられ、出土遺物は少なかったが、これも盗掘にあったものとみられます。しかし、横穴式石室で天井石の確保など石材の確保に大変苦心しているものの、丁寧に構築されていること、出土の弥生土器がこれまでほとんど把握できなかった弥生時代（原始時代）の高地性集落、境谷遺跡の貴重な資料を得たことなどが今後考古学会に寄与するものと確信しています。

本墳の発掘調査で残念なことは、西側の崖部分にあったとみられる中心的な埋葬施設が昭和40年代からの土砂採取により消滅していたことであります。

わたくしたちは古代に繁栄した豪族葛城氏・巨勢氏など大和を中心とした日本民族の先祖を追憶し、学習に資したいと念ずる次第です。

今回の発掘調査にあたり、本市教育委員会の藤田和尊技師を中心に橿原考古学研究所の諸先生方のご指導をいただき深謝いたします。さらに市教委社会教育課長・木村義明氏ほか課員諸氏、ならびに応援の大学生諸氏の汗と労力の結晶が、この成果を得たものと信じています。

御所市教育委員会
教育長 谷 村 忠 敬

例 言

1. 本書は、昭和59年度の国庫および県費の補助を受け、御所市教育委員会が調査を実施した、奈良県御所市大字室小字サカイ谷に所在する、巨勢山境谷10号墳の発掘調査報告書である。
2. 本墳は、昭和47年発行、奈良県遺跡地図第3分冊の16-B-256に該当する。
3. 調査に際しては、土地所有者・杉村太一氏、室自治区長・山崎三良氏をはじめ、地元の方々に多大な御協力をいただいた。
4. 現地調査には、御所市教育委員会・藤田和尊が同会の木村義明、植木理史、大林志津代、橋本直樹らの協力を得てあたり、権原考古学研究所・泉森蛟、東潮、松永博明氏の助言を得た。
5. 現地調査には室自治区の岡本義永、鍵本喜代二、角南義則、田中岩次郎氏および同志社大学・坂靖、関西大学・伊藤雅文、三野保之、尼子奈美枝、吉村和昭ら学生諸氏の参加協力を得た。
6. 遺物整理および報告書作成にあたっては関西大学・三野保之、尼子奈美枝、四天王寺国際仏教短期大学・高本奈美、龍谷大学・木許守、横出昌之ら学生諸氏の協力を得た。
7. 遺物整理および報告書作成に際しては、権原考古学研究所・関川尚功、寺沢薫、芦屋市教育委員会・森岡秀人氏より御教示を賜った。
8. 本書の執筆分担は目次に記す通りであり、編集は藤田が行なった。また、遺構・遺物の整図には藤田のほか、三野、尼子がこれにあたった。

本文目次

序 文	御所市教育委員会教育長 谷村忠敬	
第1章	位置と環境	(藤 田) …… 1
第2章	調査の契機と経過	
1	調査の契機	(藤 田) …… 7
2	調査の経過	(藤 田) …… 7
3	調査日誌抄	(尼 子) …… 8
第3章	遺構と遺物	
1	墳丘外形	(三 野) …… 9
2	各トレンチの所見	(藤 田) …… 9
	墳丘北トレンチ	9
	墳丘東トレンチ	11
	墳丘南トレンチ	11
	墳頂トレンチ	12
3	石 室	13
	構築および堆積	(藤 田) …… 13
	石 組	(三 野) …… 13
	調 整	(藤 田・尼 子) …… 15
4	遺 物	(藤 田) …… 16
第4章	ま と め	(藤 田) …… 29

挿 図 目 次

図1	周辺遺跡分布図	折り込み
図2	国見山遺跡採集弥生土器(米田・竹川君寄贈)	2
図3	室・ネコ塚古墳採集鉄製品	3
図4	境谷10号墳周辺古墳分布図	4
図5	室・中西遺跡採集土師器	6
図6	石川古墳群(16-B-61)採集須恵器杯身	6
図7	巨勢山境谷10号墳 墳丘測量図	折り込み
図8	墳丘北トレンチ土層断面図	10
図9	墳丘南トレンチ土層断面図	10
図10	墳丘東トレンチ土層断面図	折り込み
図11	墓道堆積状況	11
図12	墳頂トレンチ土層断面図	12
図13	墳丘断面土層図(但し検出面は横穴式石室の天井石まで)	13
図14	石室内堆積土縦断面	14
図15	石室内堆積土横断面	14
図16	小形横穴式石室実測図	折り込み
図17	墳丘北トレンチ出土遺物	17
図18	墳丘東トレンチ出土遺物(その1)	17
図19	墳丘東トレンチ出土遺物(その2)	18
図20	墳丘東トレンチ出土遺物(その3)	19
図21	墳頂トレンチ出土遺物(その1)	19
図22	墳頂トレンチ出土遺物(その2)	20
図23	墳頂部出土遺物(その1)	21
図24	墳頂部出土遺物(その2)	21

図版目次

- 図版1 1. 航空写真（西から）
2. 航空写真（西から）
- 図版2 3. 航空写真（西北から）
4. 航空写真（真上から）
- 図版3 5. 墳丘全景調査前（南から）
6. 墳丘全景調査前（北から）
- 図版4 7. 墳丘北トレンチ（北から）
- 図版5 8. 墳丘東トレンチ（東から）
- 図版6 9. 墳丘南トレンチ周溝及び墓道（南から）
10. 墳丘南トレンチ周溝及び墓道（北から）
- 図版7 11. 墳頂トレンチ（北から）
12. 墳頂トレンチ（北から）
- 図版8 13. 主体部検出状況（東から）
14. 主体部天井石構築状態（西から）
- 図版9 15. 主体部天井石構築状態（南から）
- 図版10 16. 墓道及び石室（南から）
17. 石室及び閉塞石残存状態（南から）
- 図版11 18. 石室全景（南から）
19. 石室奥壁（南から）
- 図版12 20. 石室全景（西から）
21. 石室開口部より墓道を望む
- 図版13 22. 石室左側壁（西から、左が奥壁）
23. 石室右側壁（東から、右が奥壁）
- 図版14 24. 巨勢山墳谷10号墳出土遺物
- 図版15 25. 巨勢山墳谷10号墳出土遺物
- 図版16 26. 國見山遺跡採集弥生土器（米田・竹川君寄贈）

第1章 位置と環境

地理的環境

御所市は、奈良盆地の西南部に位置する。西部には金剛山・葛城山の峰々がそび立ち、東南部には竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵などの丘陵が起伏し、それらの南をいわゆる中央構造線が走って吉野川河谷と境している。北部は低平な奈良盆地の一部を占めているが、葛城川・曾我川の上流部は南方に入り、前記の山地の間に溪谷をつくっている。

さて、奈良盆地と吉野川河谷の間にある竜門山地は主として花崗岩類よりなり、東方より西方に向うにしたがって高さを減じ幅も狭くなる。本市の東部はちょうどその西端付近にあたる丘陵地帯となっている。

金剛山の東方葛城川上流の谷と、さらに東側の曾我川の谷の間に巨勢山丘陵があり、曾我川の東側には高取山付近より次第に低くなった山地の端が拳鬮山などで終わっている。また、南方吉野川流域との分水嶺には阿田峯の低い台地がある。

巨勢山丘陵は西は葛城川の谷、東は曾我川の構造谷で切られてほとんど独立した丘陵となって南北約5kmに細長く延びている。中央部には巨勢山の高社山(295m)を始め、朝町山(286m)、さらに北方の盆地に細く延びた先端に国見山となっている。南は唐笠山(323m)を経て、重葎峠(202m)で終わっている。地質は、花崗岩もしくは閃緑岩より成っている。

歴史的環境

御所市内の縄文時代の遺跡は、後期の権羅遺跡⁽¹⁾(2)等が知られるに過ぎなかったが、本年、御所工業高校の移転に伴い調査された玉手遺跡⁽²⁾(3)では、後期の完形に近い土器も検出され、ようやくその具体的な側面も知られるようになった。

弥生時代に入ると遺跡の数は急増する。前期(新)以降の拠点的大集落として著名な鴨波遺跡⁽³⁾(4)を筆頭に本馬丘遺跡⁽⁴⁾(5)、今住遺跡⁽⁵⁾(6)、古瀬遺跡⁽⁶⁾(7)、といった平地の遺跡の他、吐田平遺跡⁽⁷⁾(8)、葛城山頂遺跡⁽⁸⁾(9)、境谷遺跡⁽⁹⁾(10)、国見山遺跡⁽¹⁰⁾(11)、といった高地性集落も後期に入ると出現してくる。

国見山遺跡⁽¹¹⁾については、掖上鐘子塚古墳⁽¹¹⁾(12)周辺で弥生土器が採集されており、その存在が推定されてきた⁽¹²⁾。近年、葛中学校生の米田・竹川両君が国見山を踏査した際、東斜面谷地地形部分から弥生土器片約100点を採集した(図2)。11のような中期的な特色を持つ個体もあるが、多くは畿内第V様式前半に属するものである。その内には1のような紀伊地方に特徴的な彌も⁽¹³⁾あり、大和における高地性集落の発生をめぐって、紀伊、五條方向からの影響が想定されている現在、採集品⁽¹⁴⁾とはいえ、これらは貴重な資料となるであろう。

葛城地域唯一の弥生時代青銅製祭器出土地として、名柄⁽¹⁵⁾(13)の地は著名である。外縁付鈕Ⅱ式

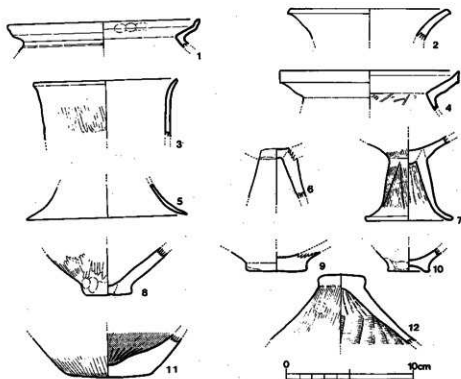


図2 国見山遺跡採集弥生土器（米田・竹川君寄贈）

⁽¹⁶⁾銅鐸と多鈕細文鏡は、地表下約90cmに30cm程度の間隙をおいて同一層内にあったという。

弥生時代後期も後半に入ると集落の実体は不明瞭となる。名柄遺跡⁽¹⁷⁾ (14)は該期以降成立してくる遺跡のようであるが、名柄小学校保管の資料を実見する限りでは、むしろ庄内式以降の土師器を主体とするようである。

古墳時代前期については、名柄遺跡、室・中西遺跡⁽¹⁸⁾ (15)の存在を考慮に入れたとしても、遺跡の絶対数は稀少であり、また該期の古墳もなく、弥生時代後期後半以降の当地の停滞は否めない。

そうした歴史的背景の中で、前代の系譜をひくことなく5世紀前葉に至って突然出現する葛城東南麓最大の前方後円墳、室・宮山古墳⁽¹⁹⁾ (16)の意義は重大である。

当地の首長墓系列はその後、掖上罎子塚古墳⁽²⁰⁾→新庄屋敷山古墳⁽²¹⁾ (17)→飯豊陵古墳⁽²²⁾ (18)→二塚古墳⁽²³⁾ (19)と移行するようであるが、御所市域に所在する室・宮山古墳と掖上罎子塚古墳については、その周濠に取り込まれる形で陪塚が築造されており、後続する新庄屋敷山古墳以下の古墳のみならず、他地域に対しても、特異性を表出している。

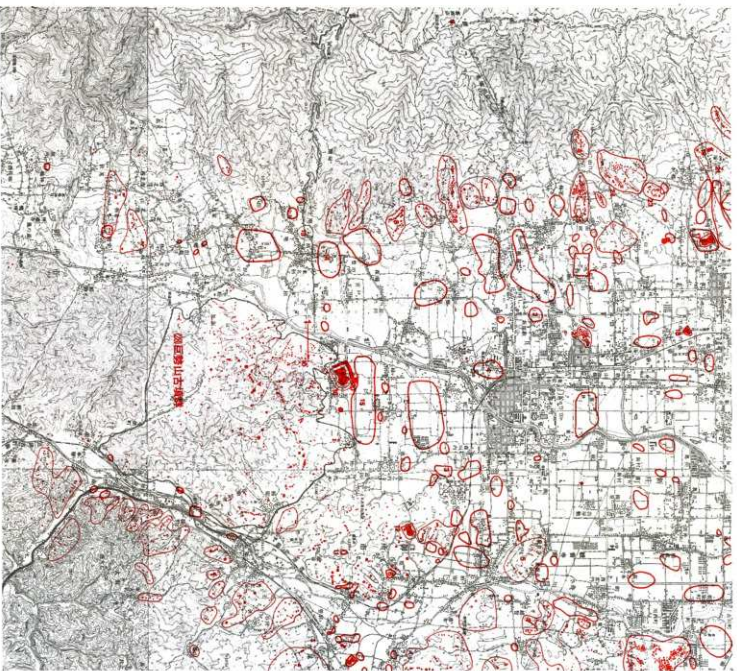


圖 1 湖沼遺跡分佈圖 (1:100,000)

- | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 01 雙湖山遺跡 | 02 雙湖山遺跡 | 03 雙湖山遺跡 | 04 雙湖山遺跡 | 05 雙湖山遺跡 |
| 06 雙湖山遺跡 | 07 雙湖山遺跡 | 08 雙湖山遺跡 | 09 雙湖山遺跡 | 10 雙湖山遺跡 |
| 11 雙湖山遺跡 | 12 雙湖山遺跡 | 13 雙湖山遺跡 | 14 雙湖山遺跡 | 15 雙湖山遺跡 |
| 16 雙湖山遺跡 | 17 雙湖山遺跡 | 18 雙湖山遺跡 | 19 雙湖山遺跡 | 20 雙湖山遺跡 |
| 21 雙湖山遺跡 | 22 雙湖山遺跡 | 23 雙湖山遺跡 | 24 雙湖山遺跡 | 25 雙湖山遺跡 |
| 26 雙湖山遺跡 | 27 雙湖山遺跡 | 28 雙湖山遺跡 | 29 雙湖山遺跡 | 30 雙湖山遺跡 |
| 31 雙湖山遺跡 | 32 雙湖山遺跡 | 33 雙湖山遺跡 | 34 雙湖山遺跡 | 35 雙湖山遺跡 |
| 36 雙湖山遺跡 | 37 雙湖山遺跡 | 38 雙湖山遺跡 | 39 雙湖山遺跡 | 40 雙湖山遺跡 |
| 41 雙湖山遺跡 | 42 雙湖山遺跡 | 43 雙湖山遺跡 | 44 雙湖山遺跡 | 45 雙湖山遺跡 |
| 46 雙湖山遺跡 | 47 雙湖山遺跡 | 48 雙湖山遺跡 | 49 雙湖山遺跡 | 50 雙湖山遺跡 |
| 51 雙湖山遺跡 | 52 雙湖山遺跡 | 53 雙湖山遺跡 | 54 雙湖山遺跡 | 55 雙湖山遺跡 |
| 56 雙湖山遺跡 | 57 雙湖山遺跡 | 58 雙湖山遺跡 | 59 雙湖山遺跡 | 60 雙湖山遺跡 |
| 61 雙湖山遺跡 | 62 雙湖山遺跡 | 63 雙湖山遺跡 | 64 雙湖山遺跡 | 65 雙湖山遺跡 |
| 66 雙湖山遺跡 | 67 雙湖山遺跡 | 68 雙湖山遺跡 | 69 雙湖山遺跡 | 70 雙湖山遺跡 |
| 71 雙湖山遺跡 | 72 雙湖山遺跡 | 73 雙湖山遺跡 | 74 雙湖山遺跡 | 75 雙湖山遺跡 |
| 76 雙湖山遺跡 | 77 雙湖山遺跡 | 78 雙湖山遺跡 | 79 雙湖山遺跡 | 80 雙湖山遺跡 |
| 81 雙湖山遺跡 | 82 雙湖山遺跡 | 83 雙湖山遺跡 | 84 雙湖山遺跡 | 85 雙湖山遺跡 |
| 86 雙湖山遺跡 | 87 雙湖山遺跡 | 88 雙湖山遺跡 | 89 雙湖山遺跡 | 90 雙湖山遺跡 |
| 91 雙湖山遺跡 | 92 雙湖山遺跡 | 93 雙湖山遺跡 | 94 雙湖山遺跡 | 95 雙湖山遺跡 |
| 96 雙湖山遺跡 | 97 雙湖山遺跡 | 98 雙湖山遺跡 | 99 雙湖山遺跡 | 100 雙湖山遺跡 |

なお、室・宮山古墳の階塚的位置にある室・ネコ塚古墳(20)は、一辺63mを測る方墳であるが、明治年間に大規模な盗掘に会い、竪穴式石室を構成したと思われる結晶片岩や各種遺物が墳頂部を中心に散在している(図3)。

刀剣類(1~6)の他、片刃箭式鉄鏃(7)、三尾鉄(8)、三角板革綴短甲片(9~13)、II-bまたはc頭甲片⁽²⁴⁾などを採集しており、これらから比定し得る本墳築造年代は、室・宮山古墳とまさに併行するものである。

さて、当地においては、これら首長墓の出現を契機としつつ、新庄屋敷山古墳の築造される5世紀後葉以降、群集墳が成立してくる。

寺口和田古墳群⁽²⁵⁾(21)、寺口千塚古墳群⁽²⁶⁾(22)、火野谷山古墳群⁽²⁷⁾(23)、平岡西方古墳群⁽²⁸⁾(24)、笛吹古墳群⁽²⁹⁾(25)、石川古墳群⁽³⁰⁾(26)、石光山古墳群⁽³⁰⁾(27)、巨勢山古墳群⁽³⁰⁾(28)等では、その群中に中・小形の前方後円墳や、中形の円墳を含んでおり、首長墓、群集墳中の中形墳、群集墳中の小形古墳といったように階層構造を具現している例が顕著である。

群集墳中の横穴式石室の規模と副葬品内容とは密接な関係があり、軍事的編成を軸として階層構造が成立していたことは既に近藤義郎、今井堯両氏により指摘されている通りであるが、より具体的には、挂甲、馬具、長頭鏃、(刀剣)を持つ首長墓以下、群集墳中で馬具、長頭鏃、(刀剣)を持つAグループ、長頭鏃、(刀剣)を持つBグループ、長頭鏃を持たないCグループに弁別が可能であり、各々は横穴式石室(玄室)規模と対応関係にあると考えられる。

したがって副葬品内容により階層構造を検討する方法は、木棺直葬等の他の埋葬法についても適要が可能である⁽³³⁾と考える。

しかしながら、当地における群集墳の調査はようやくその第1歩が踏み出されたばかりであり、現状では、その具体的なあり方を検討できるまでには至っていない。基礎資料の充実を俟つべきであろう。

さて、巨勢山古墳群には現在707基の存在が確認されており、未踏査地その他を含めると、合計840基程度の我国最大級の群集墳となる。

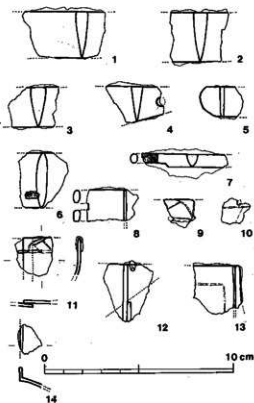
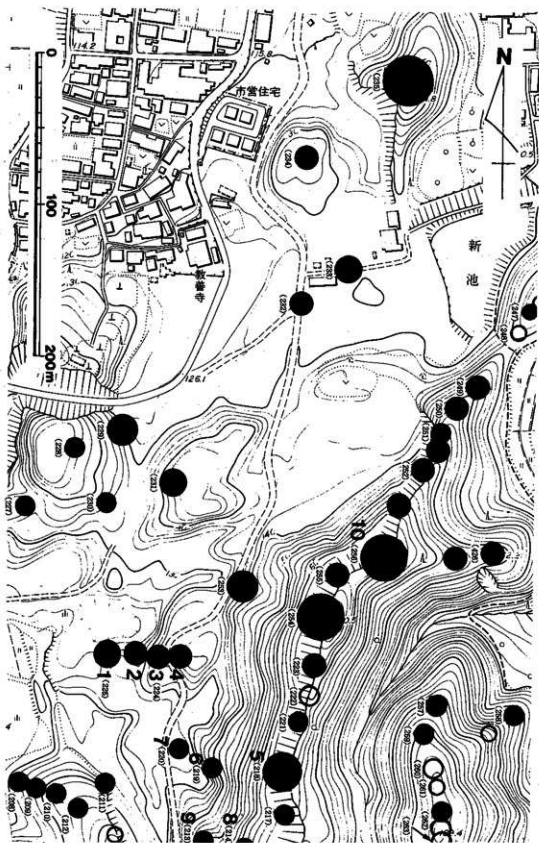


図3 室・ネコ塚古墳採集鉄製品

图4 城谷10号埴岡辺古墳分布图(1~10は巨勢山埴谷古墳番号、()内は奈良県遺跡地図巻3分冊16-B内の番号)



吉野川流域で産出する絹雲母片岩の箱形石棺を直葬した巨勢山小段⁽³⁵⁾1号墳や、タケノク地区の調査における銀製指輪を持つ古式の横穴式石室の検出、ミノヤマ地区における金銅製肩飾の検出など⁽³⁷⁾吉野、紀伊方面やさらには韓半島との関わりを想定すべき遺物も検出されているが、いずれにせよ調査例は決して多くなく、その実像を述べ得るまでには至っていない。

境谷10号墳(本報告)の所在する境谷地区では昭和48年、土砂採取に先行して9基の古墳が調査⁽³⁸⁾されている。巨勢山境谷2号墳は、巨勢山古墳群中最古の古墳であり、室・宮山古墳に併行する時期のものである。

同8号墳・9号墳は、共に6世紀前葉の横穴式石室であるのに対して、ミノヤマ地区では6世紀後葉以降横穴式石室が採用されており、大群集墳であるが故に、各種文化の受け入れ方も決して一様ではなかったことを示している。

- 註(1) 松並尚夫「葛城山麓見の縄文式土器遺跡について」(『大和志』第6巻第7号、1939年)
(2) 榎原考古学研究所 伊藤勇輔氏を主査とする調査による。
(3) 吉村定治郎「鴨部波神社附近の遺物につきて」(『大和石器時代研究』、1939年、大和上代文化研究会) 網干善教「鴨部波遺跡」(『御所市史』、1965年)
堤賢二・菅谷文則・吉村雅博・吉田二良「奈良県御所市鴨部波遺跡出土の石戈」(『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年)
伊藤勇輔「鴨部波遺跡一調査概報一」(1977年、御所市教育委員会)
伊藤勇輔「鴨部波遺跡発掘調査概報(県立御所高等学校内)」(『奈良県遺跡調査概報1978年度』、1979年)
(4) 松本俊吉(『先史文化』(『御所市史』、1965年)
(5) 松本俊吉(前出註4文献)
(6) 松本俊吉(前出註4文献)
(7) 網干善教「吐田平古墳群」(『奈良県文化財調査報告』第4集、1961年)
(8) 松本俊吉(前出註4文献)
(9) 久野邦雄「大和巨勢山古墳群(境谷支群)一昭和48年度発掘調査概報一」(1974年、奈良県教育委員会)
関川尚功「総括」(『奈良県五條市引ノ山古墳群』、1980年、五條市教育委員会)
(10) 関川尚功(前出註9文献)により初めて遺跡としての位置付けがなされた。
(11) 島本一「二三形象埴輪の新資料」(『大和志』第6巻第4号、1939年)
河上邦彦・榎元哲夫「御所市被上糠子塚前方部周濠発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1968年)
(12) 関川尚功(前出註9文献)
(13) 芦屋市教育委員会 森岡秀人氏の御教示による。
(14) 関川尚功(前出註9文献)
(15) 高橋健自「南葛城郡名柄発掘の銅鐸及銅鏡」(『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第6回、1919年)
(16) 佐原真「銅鐸の銜造」(『世界考古学大系』第2巻、1960年)
(17) 松本俊吉(前出註4文献)
(18) 奈良県遺跡地図第3分冊16-B-239に相当する。なお、中央部に布留Ⅲ式の高杯脚部2点を採集している(図5)。
(19) 網干善教「室大墓」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年)